The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東南アジアのラーマーヤナ : 1. インドネシア、マレーシア、フィリピンの伝承
Author(s)	大野, 徹
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1993, 3, p. 37-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

東南アジアのラーマーヤナ

1．インドネシア、マレーシア、フィリピンの伝承

大　野　　徹

まえがき

古代インドの叙事詩「ラーマーヤナ」は、インド国内だけでなく、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ビルマ（ミャンマー）といった東南アジア各地へも伝播している。ところが、東南アジア版ラーマ物語の内容は、インド版の中では最も標準的と見られるヴァールミーキのサンスクリット語版ラーマーヤナとは、いろいろな面で異なっている。もちろん、ラーマとシーターとの結婚、ラーヴァナによるシーターの誘拐、ラーマのシーター捜索、ラーマと猿のスグリーヴァ及びハヌマットとの同盟、ラーマとラーヴァナとの戦闘、シーターの帰還といった基本的要素は東南アジアのどの伝承にも保持されているが、構成の仕方やエピソード、モチーフ等には、東南アジア固有のものが見られる。いずれにせよ、東南アジア版ラーマ物語の特徴を知るには、物語の梗概を明かにする必要がある。東南アジアに伝わっているラーマ物語の内容を、インドネシア、マレーシア、フィリピンの３か国を中心に簡潔に紹介すると次のようになる。

1．ラーマーヤナ・カカウイン

「ラーマーヤナ・カカウイン」はカーヴィー語で書かれた古代ジャワのラーマーヤナで、詩人ヨーギシュヴァラによって書かれたとされている。書かれた年代は10世紀ないし11世紀だと考えられている。ヴァールミーキのサンスクリット語ラーマーヤナは７巻（カンーダ）から成る作品だが、ヨーギシュヴァラの作品は26章

（サルガ）構成である。物語の展開は次のようになっている。

1．アヨーダヤー国王のダシャラタはシヴァ派の信者。妃は3人いるが、子宝に恵まれない。王子の誕生を祈願してシヴァ神への犠牲祭を行なう。王妃カウシャリヤーに長子ラーマ、カイケーイーにバラタ、スミトラーにラクシヤマナとシヤトルグナ、計4人の王子が誕生する。行者ヴィシュヴァーミトラが儀式を執行するため成人したラーマ兄弟を招く。

2．行者、ラーマ、ラクシャマナ兄弟に神与の武器を提供する。兄弟、ミティラー国へ向う。ミティラー国王ジャナカは、姫シーターの婿選びをしている。シーター誕生時に現われた弓を引く事がその条件である。その弓は、誰も引く事ができない。ラーマが引くと、弓は真二つに折れる。シーターの婿にはラーマが決定、父ダシャラタの出席の下に二人の結婚式が行なわれる。アヨーダヤーへの帰途、ラーマは、ラーマ・バールガワ（斧を持ったラーマ、すなわちパラシュラーマ）の挑戦を受けるが、これを斥ける。

3．ダシャラタ王、ラーマ王子を後継者にきめる。ラーマの即位準備中、バラタ王子の母カイケーイーが、自分の息子を王位に付けるよう王に要求する。それは、かって王が彼女に行なった約束による。ラーマはシーターとラクシャマナとを同伴して森へ去る。ダシャラタ王は失意の内に死去。王宮に戻ったバラタは母親の企みを叱責、チトラクタにいる兄ラーマのもとに赴き即位を要請する。ラーマこれを断わり、身代わりに靴を渡して弟を都へ送り返す。

4．ラーマ一行、ダンダカの森に至る。そこへラーヴァナ（ダシャムカ）の妹シュールパナカー現われ、ラクシャマナに一目惚れする。シュールパナカー、美女に変身してラクシャマナに言い寄る。ラクシャマナ、シュールパナカーの正体を怪しみ、その鼻を切り落とす。

5．シュールパナカー、トリシラー、カラ、ドウーシャナに協力を求め仕返しを図るが、全員返り討ちに会う。逃げ帰ったシュールパナカー、兄ラーヴァナに事態を報告、シーターの誘拐を唆す。ラーヴァナはマーリーチャに協力を依頼する。マーリーチャは、金色の毛を持つ鹿（キダン）に変身してラーマ一行の前に現れる。シーター、鹿を捕らえてくれるようラーマにせがむ。ラーマの矢に射られて鹿が悲鳴を挙げる。シーターはそれを助けを呼ぶラーマの声だと思い込み、ラク

シヤマナに後を追わせる。一人残ったシーターの前にシヴァ派の僧侶（赤い衣をまとい、頭を剃っている）の姿に変身したラーヴァナが現われ、喜捨を求める。
6．ラーヴァナ、シーターを口説くも拒否される。本性を現したラーヴァナ（ダシャナナ）、シーターを誘拐して空中へと飛び去る。シーターの悲鳴を鳥のジャターユが聞きつけ、ラーヴァナを襲うも翼を折られる。ラーヴァナはシーターをランカー島へ連れ去る。ラーマ兄弟、シーターの捜索を開始する。瀕死のジャターユを発見して事情を聞き経過を知る。兄弟二人は悪魔のデイールガバーフと隠者シバリーの教えで、リシャムカ山へ行き、「風の神」の子ハヌマンの手助けで猿の王スグリーワに会い協力を求める。スグリーワは自分の妻ターラーを奪った兄バーリーとキシュキンダ洞窟で決闘を行なう。スグリーワに加担したラーマは、バーリーとスグリーワとの区別がつかない。スグリーワの首に花輪を掛けさせて区別し、バーリーを射殺す。スグリーワは猿の王となりバーリーの子アンガダを皇太子に任命する。
7．スグリーワ、ラーマに促がされて猿軍団を招集。ハヌマン、アンガダ等をシーター捜索に送りだす。ハヌマン一行、ジャターユの弟サムパーティの案内でランカーへ向う。
8．兎くらいの大きさに変身したハヌマン、ランカー島に渡る。アショカ園でシーターの姿を見つけたハヌマン、自分の素性を語り、ラーマに託された指環を渡し伝言を伝える。
9．果樹園を荒したハヌマンはラーヴァナの息子メーガナーダすなわちインドラジットの放った蛇の矢に捕縛される。ラーヴァナの前に引き立てられたハヌマン、シーターの返還を要求する。弟ヴィビーシャナの忠告にも拘らず、ラーヴァナ、ハヌマンの処刑を命じる。
10．ハヌマン、シーター捜索のためラーマに派遣されたことを語る。ラーヴァナ、激怒し、ハヌマンの焚殺を命ず。
11．尾に可燃性のものを括りつけられ点火されたハヌマン、体を須弥山のように大きく変える。蛇縄の鎖、千切れ、火の粉飛び散る。ランカー全市が炎上。ハヌマン帰還し、シーターから預かった宝石をラーマに届ける。
12．ランカー全市の情景

13. 兄ダシャナナ（ラーヴァナ）の作戦会議に出席したヴィビーシャナ、ラーマとの和睦を提言する。
14. ヴィビーシャナの再三再四の進言にラーヴァナ激怒する。ヴィビーシャナ、兄との訣別を決意。
15. 飛来したヴィビーシャナをハヌマンが出迎え、ラーマに紹介する。海の神ヴァルナ、ラーマにダムの建設を提案する。
16. ヴィシュヴァカルマンの子供ナラによって行なわれた架橋工事完成し、スグリーヴァ配下の猿軍団、ランカー島へ渡る。
17. ラーヴァナ、ラーマとラクシャマナの偽首を作ってシーターに見せる。悲しむシーターに、ヴィビーシャナの娘トリジャター、ラーマ兄弟の健在を伝える。
18. ラーヴァナ、シュカサーラナを猿に変身させ敵情視察に派遣。シュカサーラナ、いったん逮捕されるも釈放される。アンガダ、ランカー島へ渡り、シーターが返還されなければただでは済まないと最後通告。ダシャナナ、激怒し通告を拒否。
19. 猿軍団と羅刹軍団との間で戦闘が展開される。
20. インドラジット、ラーマ兄弟を蛇の矢（ナーガパーシャ）で捕縛する。ハヌマン、これを救済。
21－23. ラーマ、インドラ神の矢を使ってラーヴァナの首10個を射抜き殺害す。戦闘終了。
24. シーター、身の潔白を証明するため炎に中に飛込む。火の神アグニ、シーターの潔白を証明する。シーター、無傷。ラーマとシーターとの和解。
26. シーター、冥土世界すなわちパーターラへと消え去る。ラーマー行、アヨーダヤーへ帰還。

インドネシアでは、中部ジャワのシヴァ派寺院であるプランバナン遺跡（9世紀頃）にラーマーヤナの浮彫りが残っているが、物語の展開は必ずしもラーマヤナ．カカウインとは一致していないと言われる。因みに、プランバナン寺院のラーマヤナ浮彫りの概要は、次のようになっている。

アナンタ蛇の上に横わるヴィシュヌ神。ブラフマー神がヴィシュヌ神にラーマとして生れ変わる事を要請する。ヴィシュヴァーミトラ、ダシャラタ王に拝謁。

ラーマ王子、羅刹ターダカを殺害する。マリーチャ、海上に逃走。ラーマ、無敵の弓を折り、シーターを獲得する。ラーマ、ラクシュマナ、シーターの一行、帰宅の途中にパラシュラーマの挑戦を受けるが、ラーマ、これを斥ける。ダシャラタ王、ラーマを後継者とするも、カイケーイー妃、バラタ王子の即位を求めて、ラーマ王子の追放を要求する。悲嘆に暮れるダシャラタ王とカウシャリャー妃。ラーマ、シーターとラクシュマナを連れて都を去る。ダシャラタ王の死亡。ラーマ王子、バラタに即位を要請されるもこれを断り、自分のサンダルを王権の象徴として弟に渡す。森の中を行く3人。シーター、鹿の肉をくわえたカラスを追い払おうとして、逆にカラスに襲われる。カラス、ラーマの矢に射られて、頭を吹き飛ばされる。美女に変身したシュールパナカー、ラーマに言い寄る。ラーマに紹介されたクラシュマナ、シュールパナカーを受け付けない。金色の鹿を追跡するラーマ。シーターを警護するラクシュマナ。金色の鹿に化けたマリーチャ、ラーマに矢を射られ、ラーマの声を真似て悲鳴を上げる。それを聞くシーター。バラモンに扮したラーヴァナ現われ、シーターをさらう。ラーヴァナと鳥ジャターユとの決闘。シーター、指輪をジャターユに託す。瀕死のジャターユ、指輪をラーマに渡す。森の中を放浪するラーマとラクシュマナ、鰐に出会う。竹筒で水を汲むラクシュマナ。ラーマ、水を飲むも苦い味がする。スグリーヴァの涙。ラーマ、1本の矢で7本のタール樹の幹を射抜き、スヴリーヴァに威力を示す。スグリーヴァとヴァーリンとの決闘。両人の区別がつかない。ラーマ、スヴリーヴァの首に木の葉を付けて区別し、ヴァーリンを射殺す。スヴリーヴァ、妻を取戻し、猿の王に即位する。ラーマ、ラクシュマナとスヴリーヴァとの作戦会議。シーター捜索隊の派遣決定。アショカ園に現れた猿のハヌマン、シーターと話を交す。捕われたハヌマン。羅刹達、ハヌマンの尾にボロを巻き付ける。油に浸したボロに火が点けられる。人家の屋上に飛び上がったハヌマン、ランカー全市を焼き払う。ラーマ、ラクシュマナ、スグリーヴァに報告するハヌマン。海神ヴァルナの提案で島へ渡るために橋を架ける。海中に石を投げ込む猿軍団、架橋工事完成し、ラーマ率いる猿軍団、島へ渡る。

カンボジアのアンコール・ワットやヴァプオンの浮彫りと異なり、プランバナンの浮彫りは、ラーマー物語の前半部分が詳しい。後半部分は、クンバカルナと

猿達との戦い、葬儀台上のラーヴァナの死体といった断片的なものを除いて殆ど残っていない。なお。プランバナン遺跡の浮き彫りには、サンスクリット語版のウッタラ・カーンダに該当するエピソードは表現されていない。

2．スラット・カンダ

インドネシアの「スラット・カンダ」（正式には「スラット・カンダ・ミング・リンギット・プルワ」）は、マラヤの「ヒカーヤット・スリー・ラーマ」に類似していると言われる。話の展開は次の通りである。1．メッカのナビ．アダムとその子アビルとカビルの話。大洪水の説明。悪魔イダジルのノアの方舟による脱出。ビスヌとバスキの誕生。ナビ・アダムの直系子孫達の記述。
2．ラーマとラーヴァナの素性。二人の過去とこの世での誕生が語られる。魔王クワチャ・インドラがブラフマよりギリンエシを授かる。二人の間に三人の息子ニティ・クワチャ、ダイチャ・スマングリ、ジャンブ・マングリと娘チトラワティが生まれる。ギリンエシの王国はインドラプリと改称。ニティ・クワチャはブルワスプルワの王になる。天界侵入を企てるクワチャ・インドラの陰謀を、スリトルスタ、アディスラット、ブラマ・ラジャの三神が防ぐ。スリトルスタはジャワの初代国王に、アディスラットはブルワスカンダ国の国王になる。ブラマ・ラジャは魔王クワチャ・インドラの娘チトラワティと結婚してインドラプリ国の国王となる。二人の間には息子チトラバハが誕生。ブラマ・ラジャのもう一人の妃サストラワティにはサキサル、ンガマディタ、スリマンダラが生れる。一方、アディスラットには二人の息子ディマ・ラジャとルワトマジャが生まれた。ドラワティプラの王であるアディスラットの弟ムンタダリにはスリ・グタマ、ラシ・カラと言う息子二人が生まれた。チトラバハは魔王ニティクワチャを征服し、その娘ニインドラトナを手にいれて凱旋した（従姉妹との結婚）。その後チトラバハはプルワスカンダ国のスマングリの娘スケシとも結婚した（これも従姉妹との結婚）。第1王妃ニインドラトには息子ダサムカが生れ、第2王妃スマングリには双生児アンガカルナとサルパカナカが生まれた。その後ヴィビサナが生れた。
3．ダサムカは性格凶暴で乱暴な振舞いが多いため父親チトラバハに追放され、

ンガランカ島に赴く。彼はそこで、プルワ・ニング・ジャルマ（ナビ・アダム）に会い、天界、魔界等四界の支配権を授かる。同時にラーヴァナ・アジと言う名前も貰い、ンガランカ島に壮麗な御殿を建てる。ラーヴァナは、天界に侵入してアディスラットの征服を企てた。アディスラットは、ラーヴァナは猿達の生贄となるだろう。ブルガヴァの生れ変わりである白猿サング・パルダナによって滅ぼされるだろうと予言した。ラーヴァナはアディスラットの妃を横取りしようとするが、アディスラットに仕えるバトラヴィジャンとパルダナに妨げられたために二人を殺す。殺されたパルダナは、ラーヴァナへの復讐を誓ってハヌマンに生まれ変わる。

4．アディスラットの長子ディマ・ラジャは、アディスラット・マハラジャと名乗ってブルヴァスカンダの王に即位した。王弟ルヴァト・ラジャが新都造営のためマンドラプラの森を開墾。一つ残った竹藪に何か光るものが入り込むのを、夕涼みに出たアディスラット・マハラジャが目撃、罠を仕掛ける。捕まったのはヒヤン・ヴィスヌ・ムルティの孫娘バリヤダルであった。アディスラット・マハラジャは、バリヤダルと結婚。祝いに現れたヴィスヌ・パティは王にダシャラタという称号を授ける。

5．ラーヴァナは不老長寿を得ようと、ヒヤン・グルの元へ出掛けた。ヒヤン・グルはラーヴァナにヴィスヌの所へ行くよう指示した。神々は、戦の備えをした。ヴィスヌの前に現われたラーヴァナはヴィスヌの妃スリマンダンに恋慕、スリマンダンを自分に譲ってくれるようヴィスヌに要求した。断られたラーヴァナはヴィスヌと格闘しこれを打ち負かした。敗れたヴィスヌはスリマンダンを連れて逃走、人間界に降りてランチャンケンチャナの王パルタ・ヴィジャヤに生れ変る。一方、スリマンダンはンガウランギット王レスマンタカの姫君デウィ・セチャワティに生れ変る。

6．パルタ・ヴィジャヤの子アルジュナ・ヴィジャヤは、デウィ・セチャワティの夢を見てその捜索に乗り出す。マオスパティで苦行中のアルジュナ・ヴィジャヤは、訪れた10人の王達と戦い、その娘達を妻とした上、十臂の持主（ダサ・ボジャ）となる。デウィ・セチャワティも夢の中で、美貌の王子ダサバフ即ちアルジュナ・ヴィジャヤに会う。ダサバフに求婚されたセチャワティは、百体の像の

中から見出せるならとの条件で結婚に同意。結婚した二人がスルエンダ鳥に乗って空路マオスパティへ帰る途中、鳥の糞がンガランカの宮殿に落下する。激怒したラーヴァナは飛翔力を持つマリチャに調査させて、自分が口説きに失敗したセチャワティをアルジュナ・ヴィジャヤが連れてマオスパティへ向っていることを知る。直ちにマオスパティに向かったラーヴァナはセチャワティを誘拐しようとするが、アルジュナ・ヴィジャヤに見付かって痛い目に会わされる。

7．ドラヴァティプラのヒャン・グタカの後継者ラシ・グタマには妻デウィ・ロンターとの間に三人の子供デウィ・アンジャニ、スバリ、スグリーヴァが生れた。アンジャニの弟二人は、カラ・グタマの実子ではなく、デウィ・ロンターとスリヤとの情事の結果生れた不義の子である。アンジャニは母親を強請って口止め料が引き出せる「打ち出の小箱」を要求するが口論となり、隠し事がラシ・グタマに露見する。グタマは箱を海中に投げ込み、箱を取ってきた者が正当な持主だと言う。スバリもスグリーヴァも箱を取ってくることはできない。海面に浮上した二人は白い猿に変っていた。二人は復讐のため姉の顔を水面に漬けてその顔を猿に変えた。デウィ・ロンターはラシ・グタマの呪いで石に変った。アンジャニは海中で針の先に座る苦行を強いられることになった。スバリ兄弟二人は樹上で暮らすことになった。

8．悪魔キブジュトに息子ワトゥグヌンが生れた。悪魔の顔に生れたワトゥグヌンは、人間の顔になることを切望した。神々はワトゥグヌンをゲタバンジャランに変えた。ゲタバンジャランはバタラタントラの娘デウィ・タラワティを略奪したが、タラワティは悪魔を嫌って逃走、ラーヴァナとゲタバンジャランとの間で戦闘が始まった。神々はゲタバンジャランに対抗できる者を捜した。樹上で苦行中のスバリを見付けた神の使いネラダは、ゲタバンジャランに勝てば長寿を保証し、デウィ・タラワティも与えると約束した。ゲタバンジャランに勝ったスバリはタラワティと結婚、王城ラガスティナを造営した。スグリーヴァは、パティ・ジェロとなった。アルジャニの代理として水中に潜り、猿に変身したスマンダはジャンヴァバンと言う名でパティとなった。グタマは天に昇り、その弟ラシ・カラがドラワティプラの王となった。

9．デウィ・タラワティの姿を見たラーヴァナは、彼女を誘拐しようとするもス

バリに敗北し、その弟分となる。ダシャラタの妃バンドンダリの美貌を耳にしたラーヴァナは、マンドゥプラへ行ってバンドンダリを自分に引き渡すようダシャラタに要求する。バンドンダリは、体の垢で自分の分身バンドンダリ・クララルを創造して、ラーヴァナに引き渡す。ラーヴァナがバンドンダリ・クララルと同衾する前、ダシャラタが彼女と契りを結ぶ。

10. マンドラプラではダシャラタの妃バリヤダルが王子ブルガワを生んだ。それはヴィスヌの権化であった。もう一人の妃ラゴにはバスキの権化ムルダカが生まれた。バリヤダルには更にベルドナ、ラゴにはチトラドナと言う王子も生まれる。ラーヴァナに追われていたヴィスヌの妃スリは、ビビトサムカの娘に生れ変わった。それでもなお執拗にラーヴァナに追跡されるため、今度は卵に変身してラーヴァナに飲み込まれてしまう。バンドンダリ・クララルと同衾したラーヴァナは、彼女が男児を生めばそれと戦う。女児を生めば自分の女にすると宣言する。

10. ラーヴァナの妻デウィ・ケンドランは息子インドラジットを生んだが、バンドンダリ・クララルは女児を出産した。それは、スリの権化であった。娘が将来父親に犯される事態になるのを恐れたバンドンダリ・クララルは、嬰児を箱の中に入れて海に流した。箱はマンティリに漂着してラシ・カラに拾い上げられ、箱の中の女児はシンタと命名されてラシ・カラに育てられる。娘が成人したある日、ラシ・カラは、天から降ってきた弓を拾う。その弓でヤシの木9本を射抜く事ができた者に娘を嫁がせるとラシ・カラは宣言する。多くの王が試みるが誰も成功しない。ラーヴァナはヤシの木6本までは射抜いたがそれが精一杯であった。ブルガワはヤシの木9本に挑戦して見事に成功、シンタを手に入れる。

11. 郷里へ帰る途中透明な池で水浴した二人は、猿に変身する。ムルダカの勧告で二人は濁った水の池に身を浸す。猿に変身中妊娠したシンタは、再度人間の姿に戻ったものの、人間の姿に戻った後では猿の子は生めない。シンタから胎児が取り出され、母親に呪われて海中で苦行中のアンジャニの四肢の間に置かれる。アンジャニから生まれたのは白猿ハヌマンであった。

12. ラーヴァナの妹サルパカナカ、ダンドコの森で美丈夫のブルガワに惚れるも、その弟レスマナに鼻を削ぎ落とされる。妹の顔の変わりように気付いたラーヴァナは、妹の話から、シンタが長い間探し求めていたスリの権化である事を知り、

マリチャとウィルムカバフを派遣する。マリチャの化身である金色の鹿を見たシンタは、鹿を捕えてくれるようブルガワにせがむ。ブルガワが鹿を追跡中、シンタを護衛していたレスマナは、短剣（クリス）を抜いてシンタの身の回りに円形の呪文を描いた後、兄の助勢に向う。シンタは呪圏の外へうっかり出て、ラーヴァナに捕えられる。シンタの誘拐に気付いたゲンタユがラーヴァナを攻撃するが、敗れる。

13. シンタ捜索に出掛けたブルガワとレスマナとが休憩した木の上に、スグリーヴァがいた。身を横たえていたブルガワの胸の上にスグリーヴァの流す涙が落下する。スグリーヴァと知り合ったブルガワは、ラーヴァナがスバリの所へ進貢に訪れる事を知る。スグリーヴァと同盟を組んだブルガワは、スグリーヴァにココ椰子の葉を首に巻かせて識別し、スバリを殺す。スグリーヴァはデウィ・タラワティと結婚。ラガスティナの王にはアンガダが即位する。

14. ハヌマンがブルガワの皿で食事を共にした後、ランカー島へ渡る。続いて猿軍団がランカー島へ進撃する。猿軍団と羅刹軍団との間で戦闘開始。ラーヴァナはブルガワの矢に倒れ、ハヌマンが運んできた山塊の下敷きとなる。救出されたシンタは火災の中に飛び込んで純潔を証明する。バンドンダリ・クララルは、行方不明だった娘との再会を喜ぶ。

15. デウィ・ゴタクジュがラーヴァナの肖像をシンタの扇に描き、彼女の寝台の上に置く。ブルガワはシンタの貞操を疑い、身柄をマンティリディルジャへ送る。シンタはバガヴァン・ランバの庵で男児ブトラヴァを出産する。シンタとブルガワの和解。ブトラヴァはインドラジットの娘エンドラ・クマラと結婚、ブルガワの後継者となる。ブルガワとシンタ、レスマナ、チビサナ、スグリーヴァ、アンガダ等を連れて、火炎の中に身を投じる。

3．ヒカーヤト・スリー・ラーマ（シェラベアル版）

マラヤの「ヒカーヤット・スリー・ラーマ」には、異本が何種類も存在するが、本稿ではシェラベアル版（Shellabear,W.G. ）の梗概を紹介する。シェラベアル版ヒカーヤットでは、ラーヴァナ（マハーラージャ・ラーワナ）の系譜から説

き起されている。

1．インドラプリ・ナガラのブルマ・ラージャには二人の子供があった。ブルマ・ラージャの死後、長男のバダヌルが跡を継いだが、その死後は次男のチトラバハがインドラプリ・ナガラを統治した。チトラバハには、ラーワナ、クンバカルナ、ビヴシャナという息子3人と娘スラパンダキとができた。長男のラーワナは、父親からブキット・スリンディフに捨てられた。彼はそこで上下逆様にぶら下がる苦行を12年間積んだ結果、全能の神から、地上、天界、海、地下、四界の支配者たる事を認められた。天界、地下、海の支配権を3人の子供インドラジット、パタラマハーラヤン、ガンガマハースリに譲った跡、ラーワナはランカープリ（ブキット・スリンディフ）の王に留まった。

2．マハーラージャ・ダサラタは、予言者アダムの曾孫である。王城造営のため竹藪を伐採したところ、すぐに藪が復元されてしまう。ダサラタ自身が竹を切り倒したところ、竹の中から女の子が現われた。王宮に連れ帰り、マンドゥダリと名付けて育てる。成長したマンドゥダリと結婚するための行列で輿が傾き墜落しそうになったダサラタ王を侍女のバリアダリが助ける。侍女はそのために腕を骨折する。ダサラタはバリアダリが男子を出産すれば皇太子にすると約束する。マンドゥダリは王子スリ・ラーマを、バリアダリはバルダンを出産する。

ダサラタ王が竹藪で美しい姫君を発見したことをマハーラージャ・ラーワナが耳にする。飛車に乗ってやってきたラーワナは、姫を自分に引き渡すようダサラタに要求する。マンドゥダリ妃は自室に引き籠もり、皮膚を摩擦した分泌物（垢）で自分と瓜二つの女性を創りだした上、妃の衣装を着せて国王の所へ行かせる。ラーワナはその分身を飛車に乗せて連れ帰る。

ダサラタ王は、妃の分身にも我が子を生ませようと、幼児に変身してランカープリへ行き、花売りの老婆に同伴してラーワナの宮殿に入る。妃の部屋で元の姿に戻ったダサラタ王は妃と同衾、翌朝再び幼児に変身して居城へ帰る。

3．ラーワナの妃（マンドゥダリの分身）は娘を出産。ラーワナは弟ビブシャナを呼び寄せ占わせる。占いの結果、嬰児は、地上の王全てが臣従する大王の妃になるだろう。しかし、ラーワナはその大王によって死を迎えることになるだろうとの占いが出る。ラーワナは鉄の函を作らせ、嬰児をその中に入れて海に流す。

箱はドゥラタプルワ島に漂着する。海中で苦行中のマハー・リシ・カラが箱を拾い、王宮に持ち帰って箱を開ける。箱の中からは燦然たる光と共に女児が見付かる。王は、シーター・デーウィーと名付けて育てる。12才に達したシーターに、各地の王子から求婚が殺到する。マハー・リシ・カラは、１本の矢でパルミラ椰子の木40本を射抜いた者に姫を嫁がせると宣言。ダサラタ王の王子の内、侍女バリアダリの子バルダンとチトラダンとは出場を断られたが、マンドゥダリの子スリーラーマは出場を認められた。ラクサマナは兄に同行した。弓の競技が始った。10本、20本、30本と射通す者はいたが、40本全部を射通したのはスリーラーマだけであった。リシ・カラは姫を手放すのを惜しがり寺の像の中に隠したが、スリーラーマがシーターを見つけ出した。

４．結婚はしたものの、王国は既に弟バルダンに譲渡されることになっていた。ラーマとシーターとは、新天地を開拓すべく旅に出た。弟ラクサマナが同行した。ラーマ、ラクサマナ兄弟が立ち去った後、ダサラタ王は失意の内に死ぬ。バルダン、チトラダン兄弟は、父の葬儀を済ませた後、ラーマ捜索の旅に出る。兄に会った二人は、マンドゥプリ・ナガラの王位を継ぐよう要請する。父はバルダンとチトラダンに王国を与えたのだと言って断わったラーマは、身代わりに靴を与える。バルダンは兄の靴を王冠の上に乗せて帰る。

５．ラーマ、シーターの二人は、途中、透明な池で水浴した。すると二人はたちまち猿に変身してしまった。同行していたラクサマナが樹上の二人を掴まえて、濁った池の水に漬けた。二人は再び人間の姿に戻った。侍女達がシーターの体を摩擦すると、シーターが口から胎児を吐き出した。胎児は海の中で口を開けたまま苦行していたアンジャティの口の中に投げ込まれた。口は閉ざされ、アンジャティは妊娠した。月満ちて生まれたのは人間の顔をした猿で、耳にはスリーラーマの予言どおりの耳飾りを付けていた。アンジャティはその子供にハヌマンと命名した。

６．ラーワナの留守中、王城は義弟（ラーワナの妹スラパンダキの夫）ブルガシンガが守っていた。ブルガシンガは舌を長く伸ばして王城を巻いていた。帰ってきたラーワナはブルガシンガの舌で滑って転ぶ。怒ったラーワナは剣を抜いてその舌を切断する。かくて忠実な義弟は、誤って殺される。スラパンダキはブルガ

シンガの遺児を森の中に隠す。

森の中をラクサマナが薮を切り払いながら歩いている。スラパンダキの子供が隠れている薮を切り払った時、誤ってその首を切り落としてしまう。子供の死体を発見したスラパンダキは、犯人がラクサマナであることを知り、捕えて空中高く飛び上がる。ラクサマナは刀を抜いてスラパンダキの鼻を切り落とす。

7．スラパンダキが傷付いたことを知ったラーワナは、ラクサマナが独身であるため、その兄スリーラーマの妻に復讐する事を決意する。ラーワナは、2匹の羅刹を金の鹿、銀の鹿に変身させて送り込む。鹿を捕えるためラーマが庵を出る。兄の後を追いかけてラクサマナも庵を出た後、バラモンに扮したラーワナが現われ、シーターを捕えて飛車で連れ去る。帰宅したラーマ兄弟はシーターの捜査を開始する。水源地でハゲワシ（ジャターユ）の死骸を見付けたラーマは、ジャターユを蘇生させて話を聞く。ラーワナがシーターを飛車で連れ去った事を知る。

8．喉の渇いたラーマ兄弟は、矢を放って水を探す。水源地を見付けたものの、水は塩辛い。ラーマはそこでラクサマナの膝枕で4日4晩眠り込む。二人が休憩しているタマリンドの樹上に猿のスグリーブがいる。スグリーブは、兄のバリ・ラージャが親殺しの水牛と格闘をした時、洞窟の中で相討ちになったと誤解し洞窟の入り口を塞いで帰った。水牛を殺して外へ出たバリは、弟のスグリーブが猿王国を支配していることを知り、森へ追放したのであった。兄ラーマに対する弟ラクサマナの忠誠心を見て、スグリーブは涙を流す。猿の涙がラーマの胸の上に落下し、ラーマ、目を覚ます。樹下に降りたスグリーブは、ラーマの足元に平伏して、兄バリに追害された事を述べる。ラーマ兄弟、スグリーブへの協力を約束する。猿兄弟バリ、スグリーブの決闘始まる。ラーマはバリを弓で射る。矢を掴んだバリ、無縁の者を何故射るのかと詰る。ラーマ、理由を語る。矢は空中を舞い戻り、バリの胸を射抜く。すべての猿、ラーマに忠誠を誓う。ラーマ、スグリーブにシーター捜索の協力を要請する。

9．シーターの生死を確かめるためスグリーブの甥ハヌマンがランカーに派遣されることになる。ハヌマンの耳飾りに気付いたラーマは、ハヌマンが自分の子である事を知る。ラーマは親子の名乗りをし、ハヌマンと同じ葉で食事をする。その後、シーターに渡す指輪をハヌマンに託す。ランカープリに着いたハヌマンは

バラモンに扮し、シーターの水浴用の水瓶の中に指輪を滑り込ませる。バラモンに会ったシーターは、羅刹百人に警護されたラーワナのマンゴー園の所在を教える。猿の姿に戻ったハヌマンは、マンゴーの木に登って実を食い尽くした後、木を根こそぎ掘り起こす。

10. 羅刹に捕えられたハヌマンは、ラーワナの前面に引立てられる。激怒したラーワナは、ハヌマンの処刑を命じる。しかし、刀で斬っても、斧で切っても、ハヌマンは死なない。困り果てたラーワナにハヌマンが言う。自分を殺すのであれば、全身を布でくるみ、油を掛けて火をつけるしかない。言われた通りにすると、ハヌマンは屋根の上に飛び上がる。宮殿、焼失する。ハヌマンは海中に飛び込んで尾の火を消した後、帰還してラーマに報告する。

11. ラーマは大軍をランカープリに渡す方法をハヌマンに尋ねる。ハヌマンは土手道の築造を提案する。山が崩され、土砂が海中に投下される。しかし、いくら土砂を投入しても水深は深くなるばかり。ラーマは海中に矢を射込もうとする。女神が現れて制止する。そこは生命の泉なり。その水は人を勇敢にし不死身にする。泉の所有者はマハー・ラージャ・ビスタ（ラーマの祖父）なりと述べて消え去る。ラーマの軍勢、生命の水を浴びる。ラーマが祈ると、海底から土手道が出現、ランカープリに繋がる。

12. ラーワナ、兄弟二人を殺し、その首をシーターに見せてラーマ、ラクサマナは死んだと偽る。シーター、悲しむ。スリー・ジャティ（ビブシャナの娘）がラーマの生存を確認する。ラーワナ、スリー・ジャティのラーマ訪問を怒る。ラーワナ、弟ガンガーマハースーラを海底から呼びだし、土手道の破壊を命じる。蟹や魚が土手道を破壊し始める。ハヌマン、尾を海中に入れて撹拌する。毒が投入された思い、魚達逃げ散る。ハヌマン、尾を挟んだ蟹を釣りあげる。土手道完成。ラーマの軍勢、ランカーに渡る。

13. ラーワナ、作戦会議を開催。弟のビブシャナ、シーターの返還を主張する。ラーワナ、弟を追放。ビブシャナ、ラーマの軍門に加わる。猿軍団と羅刹軍団との戦闘、始まる。ラーワナの軍勢、敗北。眠っていたラーワナの弟クンバカルナ起され、出陣する。クンバカルナ、猿軍団を破るもラーマの矢に射られて戦死する。ラーマ、ハヌマンを軍師として派遣、シーターの返還を要求。ラーワナは、

スラパンダキを侮辱したラクサマナの捕縛と身柄引渡しとを要求する。ハヌマン、怒って引き返す。ラーワナ、地下にいた息子バダヤを出陣させる。バダヤの顔を見た者はことごとく燃焼してしまうことを知っているビブシャナは、大きな鏡を用意させる。バダヤの姿を見たハヌマンは、その前に鏡を置く。自分の顔を見たバダヤ、一瞬にして灰になる。

14. ラーワナの子パタラ・マハーラヤンがハヌマンの姿に化けて現れ、睡眠中のラーマを寝台ごと捕え、空中に飛び上がる。蓮華の咲く池に降下したマハーラヤン、蓮の茎の穴からラーマを地下の王国に連れ込む。ラクサマナ、ビブシャナ以下全員睡眠中なのにラーマの姿だけ見えない事に気付いたハヌマンが後を追う。蓮華の上に残されたパタラの痕跡を見付けたハヌマン、茎の中を通って地下に潜入する。地下王国の監視人タムナットガンガは、ハヌマンがランカープリへ飛翔する時に落した精液の滴を魚の女王が飲み込んで妊娠、出産した猿、即ちハヌマンの子であった。息子の案内で王宮に入ったハヌマンは、警護の羅刹達の首を捩り、寝台ごとラーマを連れ出し、蓮の茎を通って地上に出る。追跡したパタラは、ラーマの矢に射殺される。

15. 兄弟7人全員が討ち死にした後、長兄インドラジットが出陣する。インドラジットが放った魔の矢、ラーマの体を掠る。ラーマ、昏倒する。ブキット・ナビ・アダムから薬草が取り寄せられ、ラーマ、意識を回復。インドラジット、ラーマの城塞の上に立ち矢を放つ。ラーマ、ラクサマナ以下全員眠りに陥る。ビブシャナのみ睡魔に耐え、侵入してきたラーワナを斥ける。マラヤギリから薬草を持ってきたハヌマン、戦死した猿全てを蘇生させる。

ラーワナ、シーターに似た女を殺し、シーター死亡の噂を流す。シーターの安否確認にランカーに赴いたハヌマンは、インドラジットがマハー・リシの元に派遣された事を知る。報告を聞いたビブシャナ、ラーワナが死んだ羅刹達の蘇生を図っていると見抜き、インドラジットの祈祷を妨害するためラクサマナとハヌマンを差し向ける。ラクサマナはハヌマンの肩の上に乗り、インドラジットを迎撃する。天馬に乗って雲の中に姿を消したインドラジット、シーターの返還を父ラーワナに進言する。ラーワナ、拒否。インドラジット、再出陣。ハヌマンに馬を射られ馬車を破壊されて地上に降下したインドラジットをラーマが射る。肩と首を

射られて倒れたインドラジットの首をアンガダが挙げる。
16. ラーワナとラクサマナの戦いが始まり、ラクサマナが戦死する。蘇生薬を調合するための砥石をラーワナの寝台の下から取り出しに来たハヌマン、寝ていたラーワナとマンドゥダリの髪の毛を括り合わせ、マンドゥダリがラーワナの頭を拳骨で殴らなければ解けないよう呪いを掛ける。ラクサマナ、蘇生薬によって生き返る。

ラーマとラーワナの一騎打ち、始まる。ラーワナの頭や肩や肘は、ラーマの矢に射抜かれても直ぐに再生する。シーターの元を訪れたハヌマン、ラーワナの不死身の秘密を聞く。ラーワナの命は右耳の下にある小さな頭の中にあり、そこを射なければ死なないことを知る。ラーマ、ラーワナの右耳の下を射る。ラーワナ、絶命する。
17. ランカー城に入ったラーマ、シーターを発見するも、近寄る事を拒否。シーターが純潔である事を、火の神判で証明するよう要求する。シーターの足元に薪が積み上げられ点火されるも、シーターは焼け死なない。ラーマ、シーターを抱擁する。バルダン、チトラダン兄弟、ラーマの勝利を祝福する。新都ドリアプリ・ナガラが建設され、ラーマの統治が始まる。
18. ラーマの妹キケウィ・デーウィ、ラーワナの肖像画を描くようシーターにせがむ。扇の上にラーワナの肖像を描いたシーター、扇を胸の上に置いて眠りこむ。扇を見付けたラーマ、シーターを追放する。ラーマの子を身籠もっていたシーター、行者カラの元に去り、一子タバラウイを生む。行者はクシ（タバラウイのレプリカ）を創造する。

4．ヒカーヤット・マハーラージャ・ラーヴァナ
（ベルリン写本）

1．ダルマ・プラの王はブラフマ・ラージャである。王には7人の息子がいた。長男はマンクサティア、次男はチトラバハという。ブラフマ・ラージャは、未だ征服されざる国がこの世にあることを、アラーの言葉によって知る。それはシラダル・プラという羅刹の国で、そこの王はダティコチャという。ブラフマ・ラー

ジャの息子達は羅刹を恐れるが、チトラバハが征服に向かい、ダティコチャを殺してその娘ラクシャ・パンダイを連れ帰る。チトラバハの妻となったパンダイは男子を出産する。それがラーヴァナである。パンダイは、その後、ラーヴァナの弟クンバカルナ、ビビサナ、妹スラパンダカを生む。

2．ブラフマ・ラージャの死後、長男マンクサティアが即位するが、5年後死亡すると、弟チトラバハが跡を継ぐ。チトラバハの死後はマンタリラスカルが即位する。ラーヴァナは王国にとって危険な存在となったため、ランカ・プラに追放される。ラーヴァナはそこで昼間は薪を集め、夜は薪を燃やして炎の上で上下逆様になって睡眠を取るという苦行を行う。12年後、アラーがアダムを派遣してラーヴァナの願いを聞く。ラーヴァナは、地上、地下、天界、海、四界の支配を願い出る。アラーは、絶対に怒らない。人妻を盗まないという条件を付けて、願いを聞き入れる。ラーヴァナはカインダラーン（天界）をインドラジット、海はガンガマハヤスラと言うように、自分の息子たちに支配させ、自分はランカ・プラに王城を築いて住んだ。弟クンバカルナ、ビビサナ、妹スランパンダカも、ラーヴァナと同居した。ランカ・プラの住民は全員が羅刹であった。

3．ラーヴァナの王国とは僅か3か月と3日の距離の所に人間の世界があった。そこの王はダサト・ラージャという。王はダサト・ラーマンの子で、アダムの孫である。ダサト・ラージャは羅刹王国との関わりを惧れて移転を決意。新都開拓が始まるが、1本の大きな竹だけは誰に切られても直ぐに再生する。王自身が伐採した所、竹の中から美しい少女バンドゥダリ（マンドゥダリ）が現れた。バンドゥダリは天界（カインダラーン）の王女で、大雷雨の際に両親と生き別れとなったまま竹の中で生きてきたのであった。ダサト・ラージャはラタナ・デウィと名付けて妃にする。

4．新都完成後、ダサラタ王はマンドゥダリと共に観覧席に上がった。その時観覧席が傾いた。若い妃がこれを支えたため事なきを得た。王が病で倒れた時も、若い妃が3日3晩断食して神に祈願した後、国王の体を擦った。悪い物が固まって潰瘍となり膿が出て国王は回復した。傾いた観覧席を立て直し、今また命を救ってくれた若い妃に感謝の気持を抱いた国王は、若い妃が王子を出産すればその王子を皇太子に任じると約束した。妃2人には、それぞれ王子が生まれた。マンドゥ

ダリの生んだ長男は左手に矢を持って、次男は刀を持って生まれて来た。占い師達は、二人は幸運な王になるだろうと占った。若い妃が生んだ子は、自国には留まる事がない。強大な支配者となった時に兄弟に再会できるだろうとも占った。先妃の子はバルダン、チトラダン、若い妃の子はスリ・ラーマ、ラスマナと呼ばれる。

5．ダサラタ王が竹の中から美しい姫君を見付けたと言う噂を聞いたラーヴァナは、飛車に乗ってマンドゥラプラへ行き、その姫君を差し出すようダサラタに要求した。一旦部屋に閉じ籠もったマンドゥダリは、3日後現われラーヴァナの後に従った。動転したダサラタが妃の部屋へ行くと、マンドゥダリがいる。彼女は斎戒沐浴をして体を擦り、卵ぐらいの塊を作り、自分の分身マンドゥダキを創造した上、分身をラーヴァナに渡したのであった。ランカプラに渡ったダサラタは、花売り老婆の孫に扮して王宮内に入り、老婆が寝込んだすきに元の姿に戻ってマンドゥダキと同衾した。

マンドゥダキを飛車で連れ去る時、ラーヴァナは、山の上で瞑想中の行者マハーリシの上を飛行した。ラーヴァナは行者が自分を無視したと叱責したが、行者は、人妻を奪う事はしないという神との約束を破った以上、ラーヴァナには帝王としての資格はもはや無いと言い渡す。

6．ラーヴァナの妻マンドゥダキに、娘シーター・デウィが生まれた。占い師たちは、シーターがラーヴァナの王国を滅ぼすと占った。シーターは鉄の箱に入れられ、海に流された。海中に入って太陽を礼拝していたマハーリシ・カラが、箱を拾い上げ、シーターを見付けて養育した。シーターが7歳の時、諸国の王子が結婚を申し込んできた。行者は、1列に植えられたシワラン樹40本を1本の矢で貫通し得た者にシーターを稼がせると声明。しかし、誰も条件を満たせない。ダサラタ王は、バルダンとチトラダンを行者に同行させた。行者が王子二人に尋ねる。帰路は二通りある。一つは安全だが帰り付くのに3か月かかる。もう一つは3日で行けるが、途中鬼や竜、虎などがいる。どちらの道を選んで帰るのか。二人は安全な道を選んだ。行者は王子二人をダサラタ王に戻した。王はスリラーマとラクサマナを同行させた。二人は近道を選び、鬼や竜、猿などを退治してカラの都に到着した。8日目、ラーマとシータとが偶然出会った。二人の目と目が合っ

た。ラーマの矢はロンタル椰子の木40本を見事に射抜いた。カラはシータを寺の像の間に隠した。ラーマは像の目をチャンパカの花で擦ってシーターを見付け出した。ダサラタ王が招かれ、結婚式が挙行された。しかし、ラーマは国へは帰らなかった。ダサラタ王がバルダンとチトラダンとに王位を譲ると決めていたからである。

7．放浪していた二人は、森の中で二つの池に辿り着いた。一つは濁っており、もう一つは透明である。二人は透明な池で水浴した。その途端、二人は猿に変身してしまう。マハーリシから「二つの池」の話を聞いていたラクサマナは、バナナを使って2匹の猿をおびき寄せ、濁った池に浸す。二人は、たちまち人間の姿に戻る。

8．天界（カインダラン）の妖精と結婚したブガワン・ゴータマは、ある時苦行生活に入る。夫の留守中、天界を訪れてバラタグルと密通したその妻は、バリ・ラジャ、スグリヴァという息子二人とデウィ・アンジャニという娘を生む。アンジャニは、自分だけが実子で、兄二人は不義の子である事をゴータマに告げる。ゴータマは息子二人を透明な池の中に投げ込み、二人が自分の子供でなければ豚尾猿に変身せよと呪詛する。バリもスヴリヴァも一瞬の内に猿の姿に変り、樹上に駆け登る。ゴータマは妻を実家に戻した。彼女は娘アンジャニに、海中に立ち、口を開けたまま飲む事も食べることもできないようにと呪う。

9．ラーマは自分たちが猿だった時の様子をラクサマナに聞くが、答えて貰えない。彼は、シーターの体を摩擦して摩尼（精液）を取りだし、風の神に渡す。風の神はその摩尼をアンジャニの口の中に入れる。アンジャニは妊娠し、陸上に戻って猿の子ハヌマンを生む。ハヌマンは耳飾りを付けて生まれ出る。アンジャニは4歳になったハヌマンに、赤色は熱した果物の色だと教える。ある朝、山の上に登ってきた円盤形の太陽とそれを牽引している天使たちの姿を見たハヌマンは、円盤の綱を掴まえ、赤い果物を寄越せと要求するも、天使たちに断られ、地上に墜落死する。息子の死を知って嘆き悲しむアンジャニの事を、天使たちが神に報告。神は、ハヌマンの骨を拾い集め、生命の水で洗って蘇生させる。生命の水で洗浄されたため、ハヌマンは不死身となる。

10．ラーヴァナは、パダン・アンタトラヒへ出掛ける際、妹スラペンダカの夫ブー

タ・レンカウィに王城の警護を依頼する。レンカウィは自分の舌で王城を3回巻いて警護する。深夜帰還したラーヴァナは、レンカウィの舌を大蛇だと思い込み、三重になった舌を切断する。暗闇で何も分からなかったのだと言う兄の弁解をスラペンダカは、故意に殺したのだと曲解する。我が子も殺されると危惧したスラペンダカは、子供を薮の中に隠す。木や草を薙払いながら森の中を歩いていたラクサマナが、何も知らずにスラペンダカの子供の首を撥ねてしまう。犯人を捜していたスラペンダカは、ラーマとシーターを見付ける。ラーマに惚れたスラペンダカは、ラーマに言い寄るが相手にされない。ラーマの弟ラクサマナも、スラペンダカの恋心には冷淡である。スラペンダカに山頂に運ばれたラクサマナは、彼女の鼻を切り落とす。スラペンダカ、ランカプラに逃げ帰る。

11. 鼻をそぎ落とされた妹の無残な姿を目にしたラーヴァナは、復讐のためラーマの妻シーターを誘拐することを決意。ラーマの庵の近くへ飛来したラーヴァナは、手下のランタスダカ、ワルタナの二人を、金色、銀色の鹿に化けさせる。その鹿をシーターが欲しがる。シーターにせがまれたラーマは、シーターの警護をラクサマナに依頼して鹿の後を追う。ラーヴァナがラーマの声を真似て、救いを求める声を発する。ラクサマナはシーターがいる庵の回りに円陣を描いた後、兄の後を追う。老人の姿に扮して現れたラーヴァナ、3日間も食べてないと言って恵みを乞う。ラーヴァナはラクサマナが描いた円陣を踏み越える事ができない。シーターが円陣の外に手を出す。ラーヴァナは彼女の手を捕え、飛車に乗せて連れ去る。泣き叫ぶシーターの声に、バタラ・ウイスヌの乗り物である鳥ジェンタユが救出を試みるも、ラーヴァナとの戦いに敗れ墜落する。ラーヴァナはシーターをランカプラに幽閉する。庵に戻ってシーターが居ない事を知ったラーマとラクサマナは、シーター捜索を開始する。二人に発見されたジェンタユが、経緯を語った後絶命する。

12. 羅刹マンブワナと大蛇ブンガラとを退治した猿の王バリ・ラージャの噂を聞いた水牛アーマックが決闘を申し込む。決闘は洞窟の中で行なわれることになる。バリはスヴリーヴァに、洞窟の入り口5か所を閉鎖して注意するよう命じる。赤い血が流れ出れば水牛の死、白い血が流れ出ればバリの死を意味する。バリが死ねばスグリヴァがバリの妻子の面倒を見なければならない。夕方までかかった決

闘の末、洞窟の中から流れ出た血には、赤い色に白い色が混じっていた。相討ちだと思ったスグリヴァは、洞窟を巨岩で塞いで帰城し、バリの跡を継いだ。水牛を殺して外へ出ようとしたバリは入口が封鎖されていることを知って、スグリヴァを疑う。城へ戻ったバリは、格闘の末スグリヴァを追放する。

13. シーター捜索中のラーマ兄弟がタマリンド樹下で休憩する。ラーマはラクサマナの膝枕で眠り込む。仲のよい兄弟の姿を樹上で目にしたスグリヴァは、涙を流す。落下した涙がラーマの体に降り注ぎ、ラーマが眼を覚ます。樹下に降りたスグリヴァは、バリ退治を要請する。スグリヴァ兄弟の決闘始まるも、識別ができない。ラーマはスグリヴァの体に石灰を塗らせる。バリはラーマが放った矢を掴み、無縁の者の干渉を詰る。バリの手を離れた矢は一回転してバリを射殺す。ラーマはバリを埋葬してスグリヴァを王位に付ける。

14. ラーマはランカプラへ使節を派遣しようとするが、島へ渡る方法がない。そこへハヌマンが現われる。ランカプラへの跳躍を求められたハヌマンは、任務を完遂した暁には自分をラーマの実子である旨認知するよう求める。承諾したラーマはハヌマンと同じバナナの葉で食事を共にする。ハヌマンはラーマの掌の上から跳躍する。飛翔中、ハヌマンの摩尼（精液）が海中に落下、魚王の姫君に呑み込まれる。

15. ランカプラに到着したハヌマン、老婆に扮して、水汲みに来たシーターの侍女に会い、水壷の中にラーマから預かってきた指輪を忍び込ませる。水浴の際指輪を見付けたシーターが、老婆を食事にさそう。侍女の前での食事を遠慮した老婆、カーテンの陰に隠れて猿の姿に戻り、親子の名乗りをする。ラーヴァナお気に入りのマンゴーの木を見付けたハヌマン、一晩の内にマンゴーの実を食い尽し、木を引き抜く。捕らえられてラーヴァナの面前に連れ出されたハヌマン、いくら殴打されても応えない。自分を殺すには尾に布を巻き、灯油で浸し、硝石を散布して点火せよとの申し出に従って火が点けられる。ハヌマン、王城に飛び上がる。王城、炎上する。

16. ハヌマンの報告を聞いたラーマ、ランカプラへの土手道築造工事を命ず。ラーヴァナの弟ガンガマハヤスラが、大蟹に土手道工事の妨害を指示。ハヌマン、尾を海中に入れて大蟹を釣り上げ、猿軍団の餌とする。ガンガスラヤンの妨害は、

魚王の姫が生んだハヌマンの子ハヌマン・トゥランガンガが排除。土手道の完成に伴い、ラーマの軍勢がランカプラに進軍する。

17. ラーマの使節としてハヌマンが、ラーヴァナの王城に派遣される。下座に座る事を拒否したハヌマン、尾を巻いてラーヴァナの玉座と同じ高さにし、その上に座ってラーマの書簡を渡す。ラーヴァナは、シーターの返還を求めるラーマの要求を拒絶する。猿軍団と羅刹軍団との戦闘、始まる。シーターの返還を促すガンガマハヤスラ、プタラ・マハラヤン、インドラジット等ラーヴァナの子達の進言を、ラーヴァナ拒否する。海の支配者ガンガマハヤスラ戦死。冥界の支配者プタラ・マハラヤン戦死。ラーヴァナの弟ビビサナ、兄を諌めるも、激怒したラーヴァナに追放され、ラーマの軍門に加わる。ラーヴァナの子インドラジット、ラーマの放った矢で戦死。ラーヴァナの養子ブタラウイは、ラクサマナの鏡に姿が映って溶け死ぬ。ラーヴァナの弟クンバカルナも、ラクサマナに射殺される。ラーヴァナは、ハヌマンによって海中に投げ込まれ死ぬ。

18. 貞操を疑われていたシーター、燃え盛る炎の中に飛び込んで純潔を証明する。ラーマとシーター、再会する。ラーヴァナの娘ベルクガン・デウィが、父親の肖像画を睡眠中のシーターの寝間着の中に押し込む。肖像画を見付けたラーマ、シーターの貞操を疑い、ラクサマナに処刑を命ず。ラクサマナはシーターを養父カラの元に送り返す。シーター、男子を出産、ジャンガプルワと名付ける。カラは、３才になったジャンガプルワを水浴場に連れて行く。カラの水浴中、ジャンガプルワが母親の元に走り去る。少年が溺死したと思い込んだカラは、ララン草の花でジャンガプルワと瓜二つの少年を創造する。シーターは、ジャンガプルワのレプリカを引き取り、兄弟として育てる。

19. ラーマはラクサマナ、ビビサナ等と協議して、戦死したラーヴァナの子インドラジット、ガンガマハヤスラ、プタラマハラヤン、ラーヴァナの弟クンバカルナ等を生き返らせ、ランカプラに住まわせる。シーター、シーターの子供二人、ラクサマナ等を同行したラーマ、マンドラプラへ帰還する。ダサラタ王、再会を喜ぶ。

20. ラーマに父親バリを殺害されたアンガダが、ラーマに謀反を起こす。ラーマの行動は正しくないとアンガダは主張する。ラーマの部下は、アンガダを逮捕で

きない。スヴリヴァとハヌマンも、アンガダ逮捕を断り、必要とあらばアンガダを支援すると言う。アンガダの身に何事が起きたのかラーマには理解できない。アンガダは無敵である。ラーマが射た矢を手掴みにする。ラーマが斬り掛かっても刃を受け止める。バリ・ラジャが生き返っているとハヌマンはラーマに告げる。ラーマはビビサナをバリの墓に参らせる。姿を現したバリが、ビビサナに伴われてラーマの元に来る。ハヌマンもアンガダをラーマの元に連れてくる。バリ親子は抱き合って喜ぶ。バリはラーマに警告する。リグール王国はアンガダに渡すべきである。さもなくば、アンガダは今後も暴れるだろう。暴れるアンガダには私の霊が乗り移っている。ラーマは事の真相を理解、リグールの統治権をアンガダに譲渡する。ランカプラもリグールも共に栄えた。

5．ヒカーヤット・スリー・ラーマ

シェラベアル版と同じ「ヒカーヤット・スリー・ラーマ」（Hikayat Seri Rama）と言う題が付いているが、マックスウエルとウインステッドとによって報告されたこのマラヤのおとぎ話では、登場する人物の名前やプロットがシエラベアル版とはかなり異なっている。その内容は次の通りである。

1．タンジョン・ブンガ（Tanjong Bunga）王国のスリ・ラーマ王とサクトゥム・ブンガ・サタンク王妃との間には、3年経っても世継ぎができない。ラーマは、離れ島に住む兄ラクサマナを呼んで占ってもらう。ラクサマナは秘法の持ち主で、預言者でもある。宮殿の大広間に幔幕が張り巡らされ、中央に祭壇が用意され、その上は天蓋で覆われた。白布で全身を包んだラクサマナは、日没から夜明けまで祈祷を続けた後、口を開いた。国王夫妻には跡継ぎが生まれる。跡継ぎを儲けるには7艘の船で遠出をしなければならない。海岸に上陸すると、紺碧の湖がある。その湖で水浴してはならない。水浴すればたちまち猿に変身する。

2．44人の大工が招集され、7日間で7隻の船が建造された。次の7日間で同行者が選抜された。船は7日7晩かかって海岸に到着した。丘の上には予言どおりの湖がある。国王夫婦は先を争って湖に飛び込んだ。その途端、二人とも猿に変わった。従者たちは大騒ぎ。ラクサマナが呼ばれた。祭壇が用意され、呪文が唱

えられた。樹上にいた猿は、２匹とも木から降りてきて湖に飛び込んだ。水中から出てきた二人は、再び人間の姿に戻った。

３．タンジョン・ブンガに戻った妃は妊娠。生まれた嬰児は猿であった。嬰児はクラ・クチル・イマム・トウルガング（Kra Kechil Imam Terganggu ）と命名される。クラクチルは王宮内だけでなく王宮の外へも遊びに出掛ける。嘆いた国王は、クラクチルを人跡未踏の森林内に追放する。

４．海辺に出たクラクチルは、城塞を見付けて中に入る。女官たちが猿を発見、国王シャー・ヌマン（Shah Numan）に報告する。国王は猿がスリ・ラーマの子である事を知って滞在を認める。ところが、クラクチルは一晩に44篭もの果物を平らげる大食漢。国王は猿にインギル・ブル・インギル山へ行く事を勧める。しかし、赤くて丸い大きな果物だけは食べないよう忠告する。翌朝、猿は山に向う。猿は、そこで赤くて丸い巨大な果実を発見、掴み取ろうとする。それは、太陽であった。猿は地上に墜落して気絶する。

５．城外で歌と踊りを楽しんでいたターウイル国王シャー・コバドの姫君レネク・ジンタンの眼前に、一匹の子猿が突然落下してくる。城中に連れ帰った姫は、猿を遊び相手にする。行方不明になったクラクチルを案じてインギル・ブルインギルに探しに出掛けたシャー・ヌマンは、太陽から子猿がターウイル国にいる事を教えられ、取り戻してもらう。生き返ったクラクチルをシャー・ヌマンは、インギルブルインギル山の北にあるアンタブルアンタ平原へ追放する。クラクチルは猿の首長ジャンギット、マブット、バヤ、バヤパンリマを四方から呼び集め、猿軍団を編成する。

６．カチャプリ島の支配者マハラジャ・ドゥワナは超能力の持主である。ドゥワナはスリラーマの妃サクトゥム・ブンガ・サタンクに恋をした。タンジョン・ブンガへやって来たドゥワナは、金色の山羊に変身してラーマ夫婦の近くに現われる。ラーマはこの珍しい動物を捕らえようとするが、捕まらない。ラーマを誘いだしたドゥワナは、王城内に忍び込んで、元の姿に戻った。12の門を次々に開けて妃の部屋に入ったドゥワナは、妃を口説いてカチャプリへ連れ去る。城へ戻ったラーマは、妃の失踪を知る。目撃していた老婆が顛末を語る。ラーマは兄ラクサマナを呼び、妃の捜索を開始する。

7．スリ・ラーマ兄弟は、インギルブルインギル山で猿軍団の司令官となったラーマの子クラクチルに会う。クラクチルは、ラーマに協力を申し出る。ラーマは、成功すればクラクチルを自分の子だと認知すると約束。インギルブルインギル山に登ったラクサマナがクラクチルの四肢を持って遠くへ放り投げる。クラクチルは、七つの顔をもつ知り合いの魔王（ジン）の協力で、カチャプリ島に到着する。スリ・ラーマの妃サクトゥム・ブンガを拉致して来たドゥワナは、サクトゥム・ブンガが自分の実の娘であることを知る。

8．クラクチルは、水汲み女の壷の中に指輪を入れ、女達の後から城中に入り、母親と対面する。サクトゥム・ブンガはドゥワナとの話し合いを勧めるが、クラクチルは納得せず、ドゥワナの好きなココナットとマンゴーを食い荒らす。立腹したドゥワナ、クラクチルを掴まえる。しかし、クラクチルには槍も刀も通じない。火中に投げ込んでも火傷一つしない。クラクチルの全身に綿布が巻かれ、油が注がれて火が点けられる。カチャプリ全市、焼け落ちる。クラクチル、母親を救出してスリラーマの待つアンタブルアンタに引き返す。

9．7日後、タンジョン・ブンガをドゥワナが訪れ、スリラーマに宣戦布告する。更に7日後、ドゥワナがタンジョンブンガを攻撃。ドゥワナの軍勢7千の内、生き残った者は僅かに7百。ドゥワナはラクサマナを倒すが、クラクチルがインギルブルインギルから取り寄せた薬で蘇生させる。敗北を認めたドゥワナ、軍旗を降ろして引き上げる。

10．ラーマ、クラクチルを自分の子供と認知する。バンダル・ターウイル国のシャー・コバッド王のもとに使節が派遣され、姫君レネク・ジンタンと王子クラクチルとの結婚が申し込まれる。全てのハッジ、イマムの出席のもと、結婚式が挙行される。クラクチルは就寝前、猿の皮を脱いで人間の姿になり、朝起床すると皮を被って猿の姿に戻る。それに気付いたレネク・ジンタン、老婆に不寝番を命ず。クラクチルがキンマを噛んで深い眠りに陥った時、老婆が猿の皮を取り上げ火中に投じる。クラクチル王子は、その後マンバン・ボンス（Mambang Bongsu）と呼ばれるようになる。シャー・コバッドは退位し婿のマンバン・ボンスがバンダル・ターウイルの王（ラジャ）に就任する。

6．マハラディア・ラワナ

「マハラディア・ラワナ」（Maharadia Lawana）はフィリピンのミンダナオ島ラナオ湖地区に伝わるラーマ物語である。その梗概は次のようになっている。

1．プル・ナバンダイのスルタン夫婦の娘トワン・ポトレ・マラノ（マライラ・ガンディン）ティハイアの比類無き美しさを耳にしたラディア・マンガンディリとラディア・マンガワルナは、海路プル・ナバンダイへ向う。暴風に遭遇して船は難破、二人はプル・ナバンダイの海岸に漂着する。意識を取り戻した二人は、アゴンとクリンタンの演奏を耳にし、シパの競技での勝者がトワン・ポトレ・マライラ・ティハイアと結婚できる事を知る。競技では籐製の球をマライラ・ティハイアの居室の屋上に蹴り込まなければならない。〔ラディア・マンガンディリがシパの競技に勝ってマライラ・ティハイアと結婚する〕

2．ラディア・マンガンディリとその一行は、故国プル・アガマ・ニオクへの旅を続ける。途中、金色の角を持った鹿が現われる。マライラ・ガンディンがその鹿を欲しがる。ラディア・マンガンディリは、たとえ自分が助けを求めてもマライラ・ガンディンの側を離れるなと、弟のマンガワルナに指示して鹿の後を追う。鹿はラディア・マンガンディリに逆襲する。マンガンディリの悲鳴を聞いたマライラ・ガンディンが、夫の応援に向うよう義弟のラディア・マンガワルナに指示する。マンガワルナは、留守中は窓を閉め、誰がノックしても開けてはいけないと言い残して去る。マハーラディア・ラワナが現われ、マライラ・ガンディンを力ずくでプル・バンディアル・マシールへ連れ去る。兄と別れたラディア・マンガワルナが森の中から帰ってくると、壁が壊され、家の中は荒らされ、侍女達が嘆き悲しんでいる。訳を聞いて、マライラ・ガンディンがプル・ナガラのマハラディア・ラワナに誘拐された事を知る。

3．兄の身を案じたマンガワルナが森の中へ探しに戻ると、マンガンディリが意識を失って倒れている。マンガンディリはカラバオ（水牛）と闘う夢を見ていた。角で突かれて、片方の睾丸が東の方へ投げ飛ばされた。その睾丸は東の女王ポトレ・ランガウイを妊娠させた。生まれた子供ラクサマナは猿であった。マンガワルナの介抱で意識を取り戻したマンガンディリの体からは片方の睾丸がなくなっ

ている。夢は現実であった。

4．父無し児ラクサマナは父親の姿を見たことがなかった。彼は自分の父親が誰なのか知りたがった。しかし母親のポトレ・ランガウイは答えてくれない。失望したラクサマナは父を探しに家を出た。ラディア・マンガンディリ兄弟に遭遇したラクサマナは、二人が自分の父親と叔父であることを知り、ポトレ・マライラ・ガンディン捜索の協力を申し出る。ラクサマナは手下のカラバオ全員を招集して、プル・バンディアル・マシールに進撃することになった。

5．バンディアル・マシールへ渡るには盛り土の道を築かなければならない。1本の綱の片方を木に括りつけ、もう一方を持ったラクサマナが、ラディア・マンガンディリの両手で体を支えて貫ってプル・バンディアル・マシールへ跳躍する。跳躍は成功し、籐が結び合わされ、盛り土道は完成する。渡る途中道が崩れ転落したカラバオ（水牛）を待ち構えていた鰐が食おうとする。ラクサマナが鰐を制圧、鰐はマンガンディリ一行に協力することになる。

6．マンガンディリ指揮するカラバオ軍勢が、マハラディア・ラワナの王城に進撃、ラワナの軍勢と戦う。ラディア・マンガワルナがラワナと戦うが、太刀打ちできない。ラディア・マンガンディリもラワナには歯が立たない。マハラディア・ラワナは、七つの頭の持ち主である。回教王国の住民を多数死に至らしめた刑罰としてプル・ナガラへ島流しにされた。彼はそこで燃え上がる炎の上に上下逆様にぶら下がるという苦行を積んで特殊な能力を獲得しており、ナガ樹の上にある砥石で研いだ刃物でなければ倒されない。ラクサマナがラディア・マンガンディリのカンピランを、王城内のナガ樹の上に有る砥石で研ぐ。マンガンディリはそのカンピランでラワナと戦い、遂にラワナを倒す。

7．キンマが用意され、ラディア・マンガンディリとポトレ・マライラ・ガンディンの間で交換される。ラクサマナがマライラ・ガンディンの手を取って父親の元に導く。マンガンディリ一行は、ラクサマナが用意してくれた鰐の背に乗ってプル・バンディアル・マシールからプル・アガマ・ニオクへ帰還する。猿のラクサマナは、美貌のダトゥ（酋長）に変身した。

まとめ

東南アジアに伝わるラーマ物語の概要を、インドネシア、マレーシア、フィリピンの3か国の伝承を基に見てきた。それぞれの伝承には、つぎのような特徴がある。

インドネシアの「ラーマーヤナ．カカウイン」の基本的な展開は、ヴァールミーキのサンスクリット語版のそれに極めて忠実である。しかし、サンスクリット語版の最終巻ウッタラ・カーンダはカカウインには存在しない。したがって、ラーマとシーターとの「再度の別離」や「二児の出産」の場面もカカウインには無い。ヴァールミーキのサンスクリット語版ラーマーヤナの第7巻にある終章（ウッタラ・カーンダ）は、ラーマーヤナ・カカウインでは独立した物語となっている。全体は散文で、その中に韻文（シュローカ）が散在している。この韻文は、基本的には南インドのテルグ語版のそれに合致していると言われる。

ジャワの「スラット・カンダ」の内容は、サンスクリット語版ラーマーヤナとも、「ラーマーヤナ・カカウイン」とも、異なっている。殊に、冒頭の部分のメッカのナビ・アダムの系譜にはイスラム的要素が感じられるし。洪水やノアの方舟などの記述には旧訳聖書の影響が見られる。最大の特徴はブルガワ（ダサバフ）よりラーヴァナ（ダサムカ）の記述に重点が置かれていることである。「スラット・カンダ」によると、ラーヴァナはチトラバハの子だが、弟アンバカルナ、ヴィビサナ、妹サルパカナカ等とは異母兄弟になる。また、ウイスヌ（ヴイシュヌ）の化身であるブルガワ（スリ・ラーマ）は、ハヌマンの母親デウィ・アンジャニや猿の王スバリ、スヴリーヴァ等とは又従兄弟の間柄になる。

マラヤのラーマ物語「ヒカーヤット・スリー・ラーマ」は、サンスクリット語版の単なる翻訳ではなく（Dozon）、インドネシア起源である（Stutterheim）とか、南インド起源である（Juynboll）とか、言われている。事実、シェラベアルによって紹介された物語も、ラーマではなくラーヴァナの系譜から始まっている。この「ヒカヤット・スリー・ラーマ」では、ラーワナは梵天王の孫で、苦行を積んで全能の神から四界の支配権を認められた十頭二十臂の羅刹である。一方、ラーマは、予言者アダムの曾孫マハー・ラジャ・ダサラタの子だとされる。ラー

マの母親とラーワナの妻とは、ダサラタ王が竹の中から発見したマンドゥダリとその分身である。マンドゥダリの分身から生まれた娘がシーターであるから、ラーマとシーターとは同じ父を持つ兄妹の間柄になる。この兄妹相姦のモチーフは、仏教の経典「ダシャラタ・ジャータカ」にも見られる。

「ヒカヤット・マハラジャ・ラヴァナ」の内容は「ヒカヤット・スリー・ラーマ」のそれと大同小異である。両者の間の共通点として、次のような事柄が挙げられる。1。ラーヴァナはブラフマ・ラージャの孫で、チトラバハの子供である。2。ラーヴァナは四界の支配権を得るため火炎の上で上下逆様にぶら下がって苦行を積んだ。3。ダサラタ王の妃マンドゥダリは竹の中から見付かった。4。ラーヴァナの要求で引き渡されたのはマンドゥダリ自身ではなくマンドゥダリの分身であった。5。シーターはマンドゥダリの分身の娘だが、父親はラーヴァナでは無くダサラタである。6・鉄の箱に入れて流されたシーターを拾い挙げ育てたのは、マハリシ・カラである。7。シーターと結婚できる条件は、弓を持ち上げたり弓を引いたりするのではなく、40本の椰子の木を1本の矢で射通す事である。8。シーターもラーマも、透明な池で水浴して猿に変った後、濁った水に漬かって再び人間の姿に戻っている。9。ハヌマンはシーターから取り出された胎児がアンジャニの体を通して生まれている。10。王城を警護していたスラパンダキ（ラーヴァナの妹）の夫ブルガシンガ（ブータ・レンカウィ）が、ラーヴァナに誤って舌を切られ死ぬ。11。ハヌマンがランカーへ跳躍する前、ラーマは、ハヌマンが自分の子であることを認知する。12。ラーヴァナの子供（または養子）の中に、その顔を見た者は全て燃焼してしまうというバダヤ（またはブタ・ラウイ）がいるため、ビビサナが鏡を用意させる。13。火の神判とラーマ、シーターの再会。14。ラーヴァナの肖像画を基とするシーターとラーマの再度の別離。15。シーターによる男子の出産と行者によるレプリカの創造。

一方、両者の間の相違点としては、1。ベルリン写本では、バリとスグリヴァはゴータマの妻の不貞による不義の子で、父親の手で透明な池に投げ込まれ猿に変身する事になっているが、シェラベアル版ではバリ兄弟が猿に変身した理由は述べられていない。2。ベルリン写本では、ラクサマナが鹿の後を追う前に、シーターの身の回りに魔法の円陣を描くが、シェラベアル版では特別な事は行われな

い。3。ベルリン写本では、バリ兄弟の決闘の際、両者を識別するためスグリヴァの体に石灰を塗るが、シェラベアル版では何もしない。4。シェラベアル版では、ラーマ王子の出城に伴い父親ダサラタが悲嘆死するが、ベルリン写本では、ラーヴァナを退治したラーマと父親ダサラタとが再会している。5。ベルリン写本にみられるバリの霊のアンガダへの乗り移りとアンガダのラーマへの謀反は、シェラベアル版には見られない。

マックゥウエルとウインステッドによって報告されたマラヤの昔話ヒカーヤット・スリー・ラーマは、シェラベアル版とは、登場人物の名前もエピソードも異なる。次のような点が、その特徴として指摘される。1。物語の主人公はラーマではなく、猿のクラクチル（ハヌマン）である。2。クラクチルは、スリラーマとサクトゥム・ブンガが禁断の湖で水浴して猿になった時にできた子供である。サクトゥム・ブンガ（シーター）はドゥワナ（ラーヴァナ）の娘であるから、クラクチルはドゥワナの孫に当る。3。クラクチルは、昼間は猿の姿をしているが、夜寝る時には猿の皮を脱いで人間の姿に戻る。4。カチャプリ島の支配者ドゥワナは超能力の持主ではあるが、羅刹ではない。5。ラクサマナはスリラーマの弟ではなく、兄である。6。ラーマ、ラクサマナとの戦闘の結果、ドゥワナは降伏はするが戦死しない。7。ヴィビーシャナ、クンバカルナ、インドラジッドと言うラーヴァナの眷属は登場しない。8。七と言う数字が多用されている。

フィリピンのラーマ物語「マハラディア・ラワナ」では、サンスクリット語版ラーマーヤナとは異なったエピソードが幾つも見られる。それらを箇条書にしてみると次のようになる。1。ポトレ・マライラ・ティハイア（シーター）を巡る求婚者間の競技は弓をひくことではなく、籐製の球（シパ）を屋根の上に蹴り上げる事である。2。マライラ・ティハイアをマハラディア・ラワナ（ラーヴァナ）が誘拐する動機が明かでない。3。猿のラクサマナ（サンスクリット語版ではハヌマン）は、ラディア・マンガンディリ（ラーマ）の子供である。4。サンスクリット語版のヴァーリンやスヴリーヴァは登場しない。5。マハラディア・ラワナの不死身の原因が炎の上で上下逆様になってぶら下がると言う苦行にある点は、インドネシアやマレーシアのラーマ物語と共通している。

以上のように、東南アジアのラーマ物語には、ヴァルミーキーのサンスクリッ

ト語版には見られない固有のモチーフやエピソードが少なくない。それらの特徴が東南アジア特有のものなのか、それともサンスクリット語版以外のインド諸版、例えばベンガル語版、タミール語版などの影響によるものなのか明らかでない。

出典

1. Zoetmulder: *Kalangwan, a Survey of old Javanese Literature.* 1974
2. Soewito Santoso: *Ramayana Kakawin.* New Delhi 1980
3. Hooykaas,C: *Old Javanese Ramayana.* BSOAS 30 1960-61
4. Sarkar,H.B: *Indian Influences on the Literature of Java and Bali.* Calcutta 1934
5. Stutterheim, W: *Rama-legenden und Rama-reliefs in Indonesien.* Munchen 1925
6. Kats, J: Het *Ramayana op Javaansche Tempel Reliefs.* Leiden 1925
7. Groneman, I: *Tjandi Parambanan op Midden-Java.* 's-Gravenhage 1893
8. Lulius van Goor: *Notice sur les Ruines de Panataran.* Étude Asiatique 1925
9. Shellabear, W.G: *Hikayat Sri Rama, Introduction to the Text of the M.S. in the Bodleian Library at Oxford.* JSBRAS 70 1917
10. Maxwell, W.E: *Sri Rama, a Malay fairy Tale, founded on the Ramayana.* JSBRAS 27 1886
11. Winstedt, R.O: *Hikayat Seri Rama.* JSBRAS 55 1909
12. Winstedt, R.O: *An undescribed Malay Version of the Ramayana.* JRAS 1914
13. Overbeck, H: *Hikayat Maharaja Ravana.* JRASMB 11 1933
14. Alexander Zieseniss: *The Rama Saga in Malaysia.* Singapore 1963
15. Dozon, A: *Étude sur le roman malay de Sri Rama.* JA 1846
16. Barrett, C.G: *Further Light on Sir Richard Winstedt's undescribed Malay Version of the Ramayana.* BSOAS 26-3 1963
17. Singaravelu, S: *A comparative Study of the Sanskrit, Tamil, Thai and*

Malay Versions of the Story of Rama. JSS 56 1968
18. Francisco, J. R: *Indian Culture in the Philippines, View and Reviews.* Kuala Lumpur 1985
19. Francisco, J. R: *The Philippines and India, Essays in ancient cultural Relations.* Manila 1971
20. Francisco, J. R: *Maharadia Lawana.* Quezon City 1969

Ramayana Legends prevailed in Sutheast Asia

OHNO Toru

It is widely known that the Rama saga, originated in ancient India, spreads from the centre of India not only to the circumference of Indian sub-continent but also to the Southeast Asian countries. The content of the Ramayana versions of Southeast Asian areas, however, differs with that of the Sanskrit version written by Valmiki. It is therefore essential for us to know precisely the content of each legend and the main features if we desire to know the similarities and the divergencies between the Sanskrit version and the vernacukar versions of Ramayana found in Southeast Asian region.

The Rama legend is known in Indonesia as Ramayana Kakawin. It is said to have been written by Yogisvara in the 10th or 11th Century A.D. The structure of the Ramayana Kakawin is fundamentally similar to that of the Valmiki's version in Sanskrit. The final chapter called Uttara Kānda lacks entirely in the Kakawin.

The content of the Serat Kanda, another recension of Ramayana found in Java, is quite peculiar. A summary of the Serat Kanda has appeared

in Stutterheim's "Rama-legenden und Rama-relief in Indonesien." Neither the Valmiki's version in Sanskrit nor Ramayana Kakawin seems to have been identical for the most part with the Serat Kanda. The legend commences with the account of Nabi Adam of Mekah and his decendants. There can be seen several Islamic modifications in it. A great flood and Ark of Nuh are also to be described in the Serat Kanda.

The Ramanaya in Malaysia is known by the title Hikayat Seri Rama. It is reported that the Hikayat Seri Rama has probably been originated either from Indonesia or from Southern India. Malayan version introduced by Shellabear commences with the lineage of Ravana, who is regarded a monster with ten heads and twenty arms. He obtained sovereignty of four worlds, the earth, the heaven, the underworld and the sea, as the result of the ascetic practices, hanging head downward over a fire during the whole night. It is noteworthy that the Prince Rama's mother and Ravana's wife are King Dasaratha's queen Mandoodari and her prototype (replica). It is interest to note that Prince Rama and his consort Sita are related each other as an elder brother and a younger sister. So far as their marriage is concerned, it may be called consanguineous.

The content of Hikayat Maha Raja Ravana is on the whole identical with that of Hikayat Seri Rama. Ravana got his sovereignty over four worlds in the same way like that of Hikayat Seri Rama. King Dasaratha's queen Mandoodari was found in a bamboo bush in a process of clearing away jungles for the foundation of a new capital. She created her replica from the slough of her body when she was demanded by Ravana. Sita's father is not Ravana but King Dasaratha. She was born as a daughter of Mandoosari's replica. Her stepfather Rsi Kala decided to give her to anyone who will be able to shoot through forty palm trees with an arrow. Rama and Sita become monkeys once when they submerged themselves into a lake of clear water and returnrd humans again when

they were immersed into a lake of muddy water.

Both names of the main characters and esisodes described in a Malayan fairy tale introduced by Maxwell and Winsted differ those of Hikayat Seri Rama. A hero is not Prince Rama, but a monkey named Kra Kechil (Hanuman), who was born as a child between Seri Rama and Sakutum Bunga (Sita). It is also noteworthy that Kra Kechil is in the monkey shape in the daytime and appears in a human shape by taking off his monkey skin in the nights.

It is reported that a condensed version of Rama saga was discovered in the lake Lanao area in Mindanao island. The title of this Rama legend is called Maharadia Lawana. It is apprent that the chief character of the Rama legend in the Philippines is not the Prince Rama (Radia Mangandiri), but Radia Rawana who has eight heads instead of ten heads. Reader's attention will be called upon a number of episodes quite peculiar to this legend. Princess Malaila Tihaia (Sita) is given in marriage to anyone who can be able to kick a rattan ball to the pent-house where the princess lives. It is impossible to find out any particular motive for the abduction of Malaila Ganding Tihaia by Maharadia Lawana. As regards the supernatural power of Maharadia Lawana, he obtained as a result of his ascetic practices hanging himself upside down upon a fire.

A great deal of peculiar motives and Episodes can be seen in the Rama legends of Southeast Asia. It is uncertain whether the characteristics found in the Rama sagas in Southeast Asia were derived directly or indirestly from Ramayama legends in Southern India or not.